OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大村はまの授業論に関する研究(1)
Author(s)	西森, 章子; 井上, 光洋
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1998, 24, p. 71-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5340
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大村はまの授業論に関する研究 (1)

西森章子
井上光洋

目 次

1．はじめに ～問題意識と研究の目的～
2．大村はまという教師
3．大村はまの授業論
4．授業の実際 (1) ～回想録の分析を中心に～
5．授業の実際 (2) ～『子ども日本風土記』を使った授業から学ぶ～
6．本研究のまとめと今後の方向性

大村はまの授業論に関する研究 (1)

西森章子
井上光洋

1．はじめに ～問題意識と研究の目的

現在、一般的な教育観は、それまでの「教師中心」とされたものから「子ども中心」へと移行しつつある。また学校教育においてはその主体が子どもであると規定されるがゆえに、子ども一人一人に応じた授業内容の導入、もしくは子ども一人一人に応ずることができるような教科を横断する新教科の設置、そのような新教科を実行していくための授業形態が全国各地で展開されている。

現実の授業実践の場において、授業の実施・展開・評価といった一連の流れの中で中心的な役割を果たすのは教師であり、上述したような状況を照らし合わせて考えてみると、現代の教師には既存の授業観や教師観から新たな考えへの転換が求められ、授業実践の中では状況に応じて柔軟な姿勢をとることが望まれていると言えるだろう。

そして教育学分野における教師教育・授業研究といった領域では、専門家としての教師の力量を定義していくために、教師の技術をいかにとらえるか、また教師の技術をいかにして育成するかなどの問題が論議され、それらの問題に応じて実践的に数多くの研究が行われ、その知見が積み重ねられている（生田・吉崎、1997)。

また、井上は「ベテラン教師の授業というのは、そこに見られる様々な知識・知見・考えが客観的に記述されることを通して、他の教師にとっても同様に実現・実施可能であり、伝達できるものとして受けとめたい」「授業一般についての知見を教育実践の中から得なければ、積み重ねのある共通の財産にしていくということはできないだろう」という考えから、斎藤喜博をはじめとするベテラン教師に注目し、その授業記録を分析することによって教師の教育技術を解明する研究を行ってきている（井上、1988)。

本研究においては、大村はまという一人のベテラン国語教師に対する回想録を分析することを通じて、そのベテラン教師の「教師像」を明らかにし、その教師が身につけてきた教育技術の要素を得ることを主な目的としている。また同時に大村はまが行った授業の映像記録の分析を通して、今日の教師に求められる教育技術とは何かについて考えてみたい。

2. 大村はまという教師

本研究では、国語教育において今なお多くの教師に影響を与えている大村はまの授業実践をとり上げる。大村はまは表１にあるように、1906年に横浜に生まれ、東京女子大学卒業後、信濃教育の中心的存在であった長野県諏訪高女に赴任し、そこで当時国語教育の中心的人物であった芦田恵之助に出会い、国語教師としての素地を身につけた。第２次世界大戦後、「捨て身になって新しい時代の建設にうちこみたい」という気持ちから、東京府立第八高女から新制中学（深川第一中学校）に転じ、その後一貫して公立の中学校において国語教育の授業実践を行った。波多野（1990）の「この人は教師になってくれたので、日本の国語教育が今日の国際的水準にまで昇ることになった」との言葉や、これまで大村はまに直接教えを受けた生徒の数、または実践指導を受けた教師の数が非常に多いことからもその影響の大きさをうかがい知ることができよう。

表１．大村はまの略歴

年	略　歴	出会った人たち
1906	横浜に生まれる	
1925	東京女子大学に入学	安井　哲 新渡戸稲造
1928	東京女子大学卒業 ８月長野県諏訪高女に赴任	
1930		芦田恵之助
1938	東京府立第八高女に転じる	
1947	東京江東区深川第一中学校に赴任 →新しい国語教室づくり	
1949	東京都目黒区第八中学校に赴任	
1952	東京都中央区紅葉川中学校に赴任	
1956	東京都中央区文海中学校に赴任	
1960	東京都大田区石川台中学校に赴任	
1976	NHK テレビで「教える」が放映される	
1983	NHK テレビで４回シリーズ「教師であり続ける」が放映される	

3. 大村はまの授業論

大村はまについては、NHK で「教える」という番組が制作され、大村はまを“教師生活48年、今も教壇に立つ先生を追跡”というタイトルで放映された（1976年８月７日放映）。この番組記録をもとに若干述べてみたい。

はじめに48年間の教師生活を振り返って、これまで努力したことについて、大村はまは次のように述べている。

その一つは「はじめは夢中でした」「やさしい先生とか、熱心で真面目な先生というふうに考えた」のだが、教師はそれだけではだめなんだということに気がつき、結論的に「教師は、その他に未来を築く子どもたちの持つべき力を確実につけていかなければならない。それがなければ職業として誤りだ」「教師として子どもたちに本当に力をつけようと思ったんです」と述べていることである。

この“本当につけなければならない力”ということは一体何か。これが実は大村はまの一つの教育の目標の原点になっていると考えられる。例えば大村はまの教え子たちは、「自分の個性をとにかくその場で大いに発揮して、集団生活の一員として参画意識を持つということを非常に強く教えられた」ことや、「しょっちゅう話し合いとか意見をまとめるとかいうことは訓練されていた」と述懐している。これによると大村はまの”本当につけなければならない力”または“実力”とは実社会において、自己表現を行う力を指していると考えられるだろう。

これに対して、教材については、いわゆる教科書を使わず、「2度と同じ教材を、同じ子どもたちに使わない。それは子どもにとっても新鮮であるし、あるいは自分にとっても新鮮な気持ちで教室に出ることができるからだ」とも述べている。

さらに、「教師はいつも子どもたちが何を身につけなければいけないか、身につけているということをきちんと見つめていなければいけない。そうしないと新しい授業というものを私は創造できない」と述べている。

授業のやり方で、ひとつの心構えを示しているところがある。それは「子どもたちが楽しい顔をしているときに、私は冷たいような心で、子どもたちが今何を、何の力をつけつつあるのか、それを見つめている」という箇所である。つまり、この部分で子どもたちが何を身につけつつあるのかについて子どもたちを診断・評価し、次に何をやらなければいけないかを、つねに意識的に考え、次の手だてを意思決定していると言えるだろう。このように教材論を常に対置させた大村はまの授業論は、同時代に活躍した東井義雄、斉藤喜博らの授業論とは一線を画している。

4．授業の実際(1) ～回想録の分析を中心に～

ではこのような教師、大村はまの実際の授業とは一体どのようなものであったのだろうか。ここでは大村はまをめぐる回想録の分析を通じてその実像に迫ってみたい。

4—1. 分析の対象と分析手法

分析の対象となる回想文は小学館『総合教育技術』10月号増刊（1985年)「大村はま－教師の生き方と授業の創造－」に所収された24人の文章である。

この回想録を分析する手法として、井上（1996）のキーワード抽出・構造化法を利用した。この手法は個々の回想文に出現するキーワードを抽出し、それを仮説的に作成し

たカテゴリーに分類し、個別的なカテゴリーを総合化していくことによって、対象となるもの（この場合であれば大村はま）に関連する要素を構造化していくものである。その手順は表２のように表される。

表２．井上(1996)の開発による、キーワード抽出・構造化法

①対象となる文章（記述）を決める。
②文章を特徴づける「キーワード（キーセンテンス）」を抽出する。（数は特定しない）
③抽出したキーワードをいくつかのカテゴリーに分類する。作業仮説をつくり、カテゴリーを決めていき、一覧表にまとめる。
④キーワード間の関連構造を作ってみる。（階層性、近接、類似、並列、反対、対比、逆、分岐、統合など）
⑤主要キーワード群を明確にしていく。
⑥主要キーワード群に照らしてもう一度読み直し、本質的な意味・意図を捉えなおす。
⑦浮かび上がってきた意味・意図を文章としてまとめる。このとき Citation Index をする。

ここではキーワードを抽出していく中で表３のようなカテゴリーが仮説的に作成、整理、決定された。また回想文を書いている人物が大村はまにどのように接したか、立場によってその視点も異なると考え、①「実践者」としてみる視点（教育学者など）②「中学校教師」としてみる視点（大村はまの教え子）③「指導者」としてみる視点（同僚の教師、内地留学生）④「取材対象」としてみる視点（マスコミ関係の人物）の４つに分類した。その分類結果を表４－１、４－２、４－３、４－４に示す。

表３．仮説的に設定されたカテゴリー一覧

回想者	記録的なこと 人名 場所名	教師を考える	子どもを教える				大村個人			学んだこと	その他
			授業外の場面	学習の内　容	学習の場	学習教材 学習教材	行動 道具	評価 印象 エピソード	生活		
氏名				（大村の授業と直接関連性があると思われるところ）							

表４－１　「指導者」としての大村はま（１）

回想者	記録的なこと 人名 場所名	教師を教える	子どもを教える				大村個人			学んだこと	その他
			授業外の場面	学習の内容	学習の場	学習教材・素材	行動・道具	評価・印象・エピソード	生活		
宮下勲夫（長野県岡谷市立長池小学校教頭）内地留学生	大村教室、石井庄司、東京教育大学の国文科、吉田精一、倉沢栄吉、滑川道夫、石川台中学校、	内地留学、 年に一度の実践発表会、 最後の実践発表会の最後の時間、「授業のあらましと提案」、	児童文学の講座、	「このことばこそ」と題する語句・語彙の指導、ことばの学習の時間、「語句指導」の授業、グループで吟味、	図書室、国語の授業、					"貧道する物は一なり"、"不易流行"	
柏木勇夫（秋田市立旭川小学校教諭）講師として大村を招聘	倉沢先生、	秋田県国語教育研究会主催の全県大会、冬季国語教育研修会、講演、		指導授業、講義、発想、教材研究、学習の場の設定、教師の専門性、必然性、生涯学習に通じる主体的学び手を育成する単元学習のあり方、願い、愛情、単元学習、		子どもたちが作成した資料、「ことばあそび」学習の手引き、		大村先生の国語への素養、手提げの紙袋、			
野宗睦夫（広島県立誠之館高等学校教諭）	広島大学の野地先生、紅葉川中学、	全日本国語教育研究協議会、						指導技術、指導方法の多彩さ、確かさ、大村先生の具体的な実践、実践の精神			「教えるということ」大村はま語録、
菊地とく（山形大学教育学部附属中学校教諭）		研究会、		教師の自己研鑽、学びの道、辞書、本、手引き、聞き、話し、読み、書く活動、話し合い、「民話を呼んで」という単元、	国語教室、	地方の民話、					
青木幹勇（文教大学教授）	中野のサン・プラザ、倉沢先生	「はなしことば」に関する指導の研究会、	「個人文集ーわたしの本」、	国語科の指導における専門性の新しい道、 単元学習の世界、詩人的な発想、文章作法、読むことや語句その他の学習、		「課題作文帳」、		生徒理解の深さ、 専門家としての指導技術、			
北元融教（富山県氷見市立南部中学校教諭）	五反田駅、池上線、石川台、東京教育大学倉沢栄吉教授、	研修生、 授業参観、	国語教室通信、	ノート指導、文集のいろいろ、語彙指導、古典指導、生涯教育の展望	劣等生の見えない教室、国語教室	手作りの資料、多くの資料、休憩時間、録音機のコード、 生活に即した手作りの教材、		教えられる姿勢の確立、 自己に対する厳しさ、 自信に満ちた授業実践、			

表４－１　「指導者」としての大村はま（２）

回想者	記録的なこと 人名 場所名	教師を教える	子どもを教える				大村個人			学んだこと	その他
			授業外の場面	学習の内容	学習の場	学習教材・素材	行動・道具	評価・印象・ エピソード	生活		
伊藤経子 （高知大学教育学部附属小学校教諭）	高知駅、Aさん	第11回高知県国語教育研究大会、読書指導の実践と理論を深めようというテーマ 研究会の関係者、		"身を以て教える"				黒い革靴、節である人、		おしえられるということはこのうえないあたたかさに包まれること	
結解喜 （茨城県水戸市立第二中学校教諭）	水戸、海老原館生、	国語科実践研究発表、日本国語教育学会月例会、「異学年間提携学習」の実践報告、		生きる力と生きたことば、単元学習の記録の箱、	大村教室、					真の教師の資格、教師の構え、	「国語教室おりおりばなし」
古川光二 （神奈川県相模原市立相武台小学校教諭）				「自己紹介」の学習、「語句の使い方」の学習、グループごとに分担、司会や発表の役 自分が無理なく参加できる授業 自分の意見や感想を書き込む学習グループで文集づくり、		「ある生徒の感想」という資料、 「宮沢賢治」の学習、 「よだかの星」「貝の火」の朗読、 「古事記物語」「ヤタガラス」の放送を教材として学習 「けんじゅう公園林」		優しい笑顔、美しい言葉 生徒一人一人の人格を認めてくれた 「仏様の指のような見事な技術を持ちたい」		国語学習が自分自身の人生を考える場	「教えるということ」
中西一弘（大阪教育大学教授）	懇親会の席 京都の大原、寂光院	大下学園の第一回国語教育研究会、大阪の国語教育研究会での講演、 指導実例 教材研究の手順、体験談	新しい国語教科書、全ての文を品詞に分解、同じ語句が3年間にわたってどのような頻度で出現しているかの調査、 準備的指導一本格的指導一復習・発展の指導 徹底した教材の分析法 教科書全体を対象			安野光雅、「旅の絵本」、作文教材 木下順二、平家物語、	準備作業、一語一語に至るまでの分析、長期的計画	関心の網の広く多方面に張り巡らされている感 人生をよりよくいきようとする先生の信念 心情えと実行が大切	観劇、名所旧跡の見物 山本安英、エロキューション（表現法）、朗読のテープ音読指導 教会のオルガニスト		
吉田豊 （神奈川県川崎市立生田小学校教頭）	倉沢先生、文部省、石川台中学 神奈川県教育センター、西尾実先生 教頭さん	二時間の読書指導単元の参観 大部な資料 研究会、 内地留学生の参観、講演	千名近くの申し込み、 指導法の工夫の大切さ 大村流の時間の創り方 新しい読書指導の具体的提案	「先生への手紙」、		安野光雅、「旅の絵本」、 できる子できない子をつくらない教材、		マンネリを排し、常に新たなものを創り出そうとされているところ 常に新しいものに挑戦、授業実践を続けられる闘志 「私はいかによい方法と思っていても二度と同じ方法は使いません」 「私は倉沢先生に授業を見ていただきたくて毎月やっているのです」 「工夫することが教師の愛情」 「芦田先生から結婚のお話があったのよ」 朗々たる声、			
桑原隆 （筑波大学講師）	石川台中学校、西尾実先生、筑摩書房、西尾研究室	実践研究発表会、軽井沢での研究会、	百余名の参加者、一人一人の名前が書かれた資料 国語教育の実践、資料を郵送、ビニールの袋、	単元学習、		数年百余名の生徒 何十枚、何百枚もの資料、	七つ道具といわれる様々な小道具 教材を探す秘けつ、	先生の血筋、機械や小道具に長けている、機械に強い人 無類のお話好き アンテナ、まめに行動する、 万事細やかな気配り、	本屋に行く日、	資料というもののあり方、資料の重大さ、資料に介在する一人の人間の機微、人間関係の機微	「大村はま国語教室」

表４－２「中学校教師」としての大村はま

回想者	記録的なこと 人名 場所名	教師を教える	子どもを教える				大村個人			学んだもの	その他
			授業外の場面	学習内容	学習の場	学習教材・素材	行動・道具	評価・印象・エピソード	生活		
笠原美祢（諏訪高女卒）				50人分の作文の山 教室はしんと静まり返っていた 三組150人の作文 学習記録 優、良、美の評価 先生の感想 「努力」「学力」「しつけ」の三段階評価 評価の内容は13項目 購読、作文、文法、習字	先生との約束で決められた記号 週６時間 批正の時間 作文と批正の時間 国語の時間	いろいろなプリント、副読本 芥川龍之介氏の「蜘蛛の糸」	藁半紙	同じ教材は二度とお使いにならなかった 強靭な精神力			
北原圭子（石川台中学校卒）				国語の授業 書くことと考えることと読むことが非常に多かった	図書室	今日の授業のためのプリント、色のきれいなシール、色画用紙	ハンドベル、移動黒板、小さな丸イス 一対一	「モモ」のような人 鋭い感覚	大村先生の生活は超人的	言葉だけでなく体で会得したもの	先生の授業が憂鬱な生徒
小西まゆみ（東京都大田区立雪谷中学校教諭・石川台中学校卒）				「問題の言葉」探し	一年B組の教室			生徒の意見を尊重する、既成の知識に頼り切らない 一人一人の生徒を大切にされてきた先生の信念		人の道 どんなに懸命に努力したとしても必ず報われるとは限らないということ	
小林明（東京都立立川ろう学校教諭） 第八中学校卒	I君、 伊藤君、羽島知之、 河口湖畔		学級新聞、 八中読売と名付けた学校新聞、 運動会の号外、 一泊泊りの修学旅行、	グループ学習 新聞づくりの単元学習 生きた体験学習 校外学習、 手紙の書き方、会議の仕方、雑誌の編集、読み、書き、話し、きくの活動 学習記録、		学習材料の更紙	消極的な子に発言のヒント	国語科教師、学級担任先生のバイタリティーと勇気、信念の固さ	都立大学駅近くの間借りのお宅	広く人間を育てる本来の姿	クラス会「おはま会」、生き証人 多くのやっかみ半分の批判、父兄は危惧の念
小林俊介（東京貿易勤務）	石川台中学校、吞川、		読書生活の記録、 毎日毎日の読書の記録、 読みたい本、感想文、	生徒たちによるグループの作業、 教科書を使う授業がほとんどない 数人で一つの作業、学習記録、 国語教室	図書室、	教科書を使う単元、「ことば」ないし「言葉」ないし「コトバ」という語、 罫紙、ガリ版、わら半紙、プリント、原稿用紙、表紙、あとがき、奥付					
吉田恵美子（荒川区第九中学校講師）	府立第八高女、石川台中学校、	実践研究発表会、参会者、		一年で作文、二年で講読、作文帳、赤ペンの批評、自分の書いた作文、 毎時間の学習の記録、			三日に一度は本屋を歩く	厳しい姿勢、	４種の日刊新聞、たくさんの新刊書、舞踏家武原はん、	自分を磨くこと、	
吉田恵美子 旧府立第八高女卒	府立第八高女 山本猛校長		連絡事項 けい紙、 読書の記録	購読、作文、文法、書道 敬語の学習、						社会生活の基本のようなこと 報告の責任の所在をはっきりさせる	「ことばの勉強会」

表4－3　実践者としての大村はま

回想者	記録的なこと 人名 場所名	教師を教える	子どもを教える				大村個人			学んだこと	その他
			授業外の場面	学習の内容	学習の場	学習教材・素材	行動・道具	評価・印象・エピソード	生活		
井上敏夫（埼玉大学教授）	石川台中学校、			子どもたち全員が後等生みたい、会議の司会、作文記述の時間、		日本人論、	二言三言助言、大村先生の指導法、心理を活かして指導法を案出、	こまねずみ、			
鈴木栄三（山形県教育庁学事課長）				教室、談話、授業、講話、教師として人間としての全体験、枕草子の授業、「源氏物語評釈」、平家物語、群読、	中学校の国語教室、	新聞、単行本、パンフレット、車中広告、ご自身の発見による資料、先生の謄写版による手作りの教材			山本安英の会、	木下順二氏、５０年の国語教師としての道 教材探索の目、	
田近洵一（東京学芸大教授）				新しく発掘された教材、自身の教材との出会い、国語科、国語教師、 読書材、教材発掘、単元学習、読書生活、学習者の言語生活、ことばによる人間的なふれあい、喜びを内在した思想形成の営み、確かなコミュニケーション、相互理解、生きた言語生活、国語教育の理念、実践的構想、	大村国語教室、 図書館で展開、	手引き、大村先生の学習の手引き	、	自身がすぐれた読書人、自身の豊かな読書量、			

表4－4　「取材対象」としての大村はま

表4-4.「取材対象」としての大村はま

回想者	記録的なこと 人名 場所名	教師を教える	子どもを教える				大村個人			学んだこと	その他
			授業外の場面	学習の内容	学習の場	学習教材・素材	行動・道具	評価・印象・エピソード	生活		
佐田智子（朝日新聞社会部記者）	第八高女、新制中学、						新しい教材や授業法の開発、 個別指導に近い指導、	小柄な老婦人、初々しい女学生のような雰囲気、「すごい言葉」、「天職」 先生の存在そのものがまさに教師 一品の芸術品、		教師という存在は「鏡」、教えるということは生きてみせること、	朝日新聞の「いま学校で」シリーズ、
杉崎勝明（NHK高松放送局ディレクター）	大田区立石川台中学校、 広島大学野地潤家、		単元の発想と展開、					準備室の書棚、新しい本 具体的な事実を大切にし事実から離れない授業、授業を組織するということ、授業を生み出す準備の大切さ			”教える”－中学校教諭　大村はま－、「私の自叙伝」”教え続けた５０年”－大村はま－ ”大村はま先生に学びて”NHK教育テレビ「教師の時間」、”実践の記録”
杉崎勝明（NHK高松放送局放送部チーフディレクター）	諏訪高女時代、藤原ていさん 目黒八中時代、浅井昇、石川台中学校 前田夏子	体育・音楽・美術といった分野の研究会、		当時の取材（撮影）の限界を超えていた授業、私の力量では及ばない授業 独創的な単元構成、個人学習、グループ学習、全体学習、それぞれ各自のプログラム			授業の秘密をとく３つのカ	「教科一辺倒ではない新しい授業」授業を創造するプロ、「私の授業、テレビではわかりにくいでしょう。無理でしょう」		教え子がよく授業の内容を記憶している 多くの共通点 文化遺産、	”教える”－中学校教諭大村はま－ 授業を紹介するだけで勝負できる番組、二万フィートに及ぶフィルム、 教師とは何かを原点に返って考える番組

4－2．分析の結果と考察

これら４つの視点を持つ人々24人が挙げた大村はまの授業に関するキーワード、キーワードの属するカテゴリーの比較をしてみると、表５のように、その立場によって大村はまを見ている側面が異なっているということがわかる。同時に、４つの視点・立場の人々が重複して挙げている部分がある。それは、教室内で「子どもを教える」にあたって、大村はまが実践した「学習の内容」と「学習教材・素材」である。これら２つのカテゴリーは大村はまについて語る上で、大村はまに接した人々にとって非常に印象に強く残っている事実であると推測されることからこれらのカテゴリーは大村はまの授業を特徴づける要素であると思われる。

上述した多数の人々が想起しているカテゴリー「学習の内容」、「学習教材・素材」に含まれるキーワードを総合的に重ね合わせてみてみると、大村はまが多様な素材（学習の素材、大村はま自身は題材とも呼ぶ）に目を向けていることがわかる。それらは生徒にとっては、自分の生活の中に存在しているものであり、かつ何らかの形で「ことば」に関連しているもの（新聞、車内広告、本の推薦文）である。またそれらの素材を中心にして進められる学習の内容も、「手紙の書き方」「会議のしかた」等の単元名に現れているように、「ことば」を軸にして生徒が日常過ごしている「生活」と乖離しないよう心がけられている。

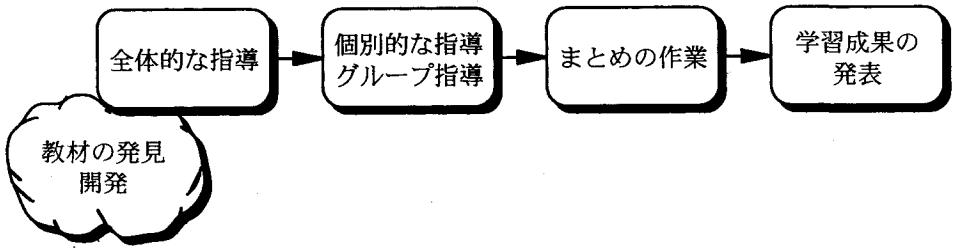
表５.大村はまを回想する４つの立場と、各立場の人物が多く回想するキーワード

どう接したか	人数	属するキーワードの多いカテゴリー	立場（例えば）
「実践者」として見る	12人	子どもを教える→ 学習の内容、学習教材・素材 大村はま個人→ 評価・印象・エピソード	教育学者
「中学校教師」として見る	7人	教師を教える、 子どもを教える→ 学習の内容、学習教材・素材	教え子
「指導者」として見る	3人	子どもを教える→ 学習の内容	同僚の教師 内地留学生
「取材対象」として見る	2人	大村はま個人→ 評価・印象・エピソード	マスコミ関係者

4－3．大村はまの授業展開とそれを支える「教材観」

一般に大村はまの授業の展開過程は図１に示されるような単元学習と見なされており、その過程において生徒自身が様々な道具を利用しながら、自分だけの教材を作り上げている。

図１．大村はまの一単元の構成



この授業展開過程の中で一番大村はまが重要視しているものは「素材（題材）」であり、素材を教材化していくプロセスは興味深い。筆者はそのプロセスを①教材の発見、②教材の収集、③授業への展開の３段階に分けて考察を行う。①教材を発見する段階で大村はまが見つけだす材料（題材）は大村はまの日常生活の中に存在するものであり、それは同時に生徒の日常生活の中にも存在するものである。またそのレパートリーは多彩であり、本、文学書、新聞といった文字中心のものから絵本、漫画、写真など映像を含んだものもある。②収集の段階で特徴的なのは即時的に「単元内容に合わせて」素材を収集するのではなく、長期的な視野に立って、学習者である生徒と共に素材を収集している点である。また扱う事項に関連するものを可能な限り多く収集している点を挙げることもできるだろう。③展開の段階では、②収集の段階と同じく、生徒の参加が非常に重要となっている。これは「子どもにとって『価値』のある教材にするために」大村はまが一つの素材を全て一人の生徒に任せることからもうかがうことができる。また生徒の学習の動機づけとして大村はまによる「発問」が大きな契機となっている点も見逃すことはできない。

例えば単元「漫画について考える」では、「漫画はどうして面白いのか」「（生徒がよく読んでいる漫画を指して）この漫画が古いという意味がわかるか」という問いかけを大村はまが行い、生徒がその発問に応える形で調べ学習が展開された様子が示されている。

５．授業の実際（２）～『子ども日本風土記』を使った授業から学ぶ

次に大村はまが行った実際の授業について、映像記録（表６）から一部を取り出し大村の教授行動、特に発問に注目して分析を行う。

これは『子ども風土記』という本を使って行った授業である。この本は、県別に47冊で構成されており、クラスの一人一人に別々の本を渡すことによって、一人一人に重い責任を持たせることができると考えたのである。まずパンフレットを読み、次に本を読みながら、そのパンフレットに書かれている推薦の通りだと思うところに赤いテープをはさみ、推薦してないけれども自分自身がよいと思った、気に入ったところ、感動した

というところは黄色いテープを挟む。またこの点はどうかな、というふうに疑問を持ったところには青いテープをはさむことをさせている。その間一人一人の子どものところを回りながら、子どもたちが何を考えているのか、あるいは指示した作業が的確に行われているかどうか、机間巡視しながら個別的な指導をしている。

次に教師の発問と子どもの応答関係を考察する。表6の行動はそれぞれ、①Tはすぐ答えられる指示的な要請行動であり、②Sは、そのまま受けられる応答であると見なすことができる。また③Tは、子ども自身がそれを受け入れ、授業で確認したということになり、⑤Tは、子どもの応答に対して、さらに掘り下げ深めていく行動である。この⑤Tに対する生徒の応答⑥Sは、そのまま教師が受け入れられる応答とも考えられるが、ここでは、それをさらに解明していこうとしている。⑦Tは応答内容を解明していく行動で、⑧Sの応答では答えになっていない。単なる生徒の確認だけなので、さらに⑨T「どういう風に？」と具体的な例を挙げるように、内容とその主旨を解明する行動をとっている。⑩Sの応答は、さらに考えさせる必要があると思われ、⑪Tは確認しながら応答内容を生徒に返し、さらに⑨Tと同じように、⑬Tで具体例をあげるような解明的な要請行動を行っている。⑮Tも内容とその主旨を解明する行動である。

このように、⑦T、⑨T、⑬T、⑮Tの発問に共通してみられる点がある。すなわち、その応答の内容をさらに解明し、掘り下げ、焦点化していく解明的な行動を繰り返すことによって、生徒に例をあげさせ、別の視点から考えさせ、思考やイメージを発展させるような発問を行っているのである。

⑯Sの応答などは非常に情意的な側面で、文章を読んで心の中からイメージをわかせている。

大村はまの教授行動の中で多く見られるのは、子どもに対する問いかけ・発問であり、これは子どもの反応・応答への2次的対応行動であり、解明行動でもある。つまりそれだけ子どもたちに考えさせ、思考を掘り下げていくことを、教師が常に意識しながら子どもに問いかけていると言えるだろう。

表6．大村はまの授業の記録（プロトコル）～『子ども風土記』を使った授業

①T：……さんはね、方言がどうとかしたってところを見せてちょうだい。
②S：はい。ここです。
③T：あ、そう。あのね、方言なども書いてあるので、そのことも書いてほしいって書いてあるでしょう？
④S：はい。
⑤T：どうして方言が出てるってことをそんなに推薦するようになるの？
⑥S：方言が書いてあるとその土地や、そこに住んでいる人の風俗などが出ていいと思ったから。それから……
⑦T：ちょっと待って。方言が出ていると風俗が出ているわけ？

⑧S：はい。
⑨T：どういうふうに？
⑩S：ぼくの場合は鹿児島県で、種子島の方言なんですけど、ここには昔、藤原時代のころから罪人の流される島だったから鹿児島などよりより中央に近い言葉が使われていたと書いてあるんですけど、そういうことから風俗が出るんじゃないかと思ったから、もっと推薦したらいいと思いました。
⑪T：うん。中央に近い言葉がここにはあるってわけ？
⑫S：はい。
⑬T：あ、そう。じゃ、風俗が出るっていうのは、たとえばどんな言葉で？
⑭S：たとえば、“あなた”ということを“わっつ”といったり、“カエル”というのを“バク”といったりして、そういうので何か出てるんじゃないかなあと思いました。
⑮S：あ、そう。その土地のその言葉をいっている人の顔つきまでが、浮かんだりするっていう意味？
⑯S：はい。なんか、畑仕事から帰ってきたおじいさんやなんかが、そういうふうな言葉を使っている情景とかが目に浮かんできたりする……
⑰T：あ、そう。それは、作文の中の人の言葉でしょう？
⑱S：はい。人の会話している言葉。
⑲T：あ、会話している言葉ね。そう。

6．本研究のまとめと今後の方向性

大村はまをめぐる回想録や授業記録を分析することにより、大村はまの授業論、または授業のようすの整理を行った。まずはじめに、大村はまの授業の特徴は、教材開発の手法、とりわけ教材となる題材（素材）の選び方に最も現れており、その題材（素材）は「教師の生活」と「子どもの生活」の両方に存在するものが積極的に使われていることがわかった。次に教材開発の背後にある大村はまの教材観と共にその教材化の手法を明らかにすることができた。例えば大村はまが題材（素材）を教材化する段階には①教材の発見、②教材の収集、③授業への展開の３つがあり、それぞれの段階において学習者である子どもの参加が大きな役割を果たしていること、そのきっかけともなる発問は大村はまの授業の中で重要な役割を果たしていることが確認されている。最後に、授業の映像記録から大村はまの授業展開過程を考察することによって、大村はまが解明的な発問を繰り返すことによって、生徒に例をあげさせ、別の視点から考えさせ、思考やイメージを発展させるようとしていることが明らかになった。

以上のような分析結果を重ね合わせることによって、以下のような課題を見い出すことができるであろう。それは例えば、「回想録」という分析対象からは引き出すことのできる要素があることが認められると同時に、引き出すことのできる要素に限界がある

ということ、また大村はまの教育技術は学習者にどのような影響を与えていたか、授業の実際に迫りうることができなかったというようなことがあげられる。よって、大村はまが「すぐれた教師」たる所以を学習者による学習記録（鳴門教育大学所蔵）やその他の授業記録（映像記録・文字記録）の分析を通じて、今後の研究の展開を図っていきたいと考えている。

引用文献・参考文献

有園　格（1993)「学習指導要領と学力の構造」『悠』８月号、９月号
大村はま（1996)「教えるということ」共文社
大村はま（1989)「教えながら　教えられながら」共文社
波多野完治（1990)『大村はま国語教室の創造性』「授業の心理学」p.172－188、小学館
井上光洋（1988)『授業実践・指導事例から学ぶ　2.大村はまの授業から学ぶ』東洋、中島章夫監修授業技術講座4「教師の実践的能力と授業技術」ぎょうせい
生田孝至・吉崎静夫（1997)「授業研究の動向」日本教育工学雑誌 vol.20, No.4, p.191－198
西森章子（1997)「教材開発の手法―国語教師大村はまの授業観を基に―」教育方法学会第33回大会発表要旨、p.37
清水文雄、野地潤家編著（1966)「大村はま先生に学びて」広島大学教育学部国語教育研究室編

Research on the Theory of Teaching(1) An Excellent, Experienced Teacher, Omura Hama

In this study, the author takes Omura Hama who has been teaching Japanese in secondery school and trys to see the reason why Omura is called "an exellent teacher" in Japan. There are two sections about her here.

First, using the Structuring method of Keyword and analysing the reminiscence about Omura,the results show that she was teaching in her classroom with many materials she found and developed.

Second, analysing the visual record, some patterns of her teaching-behaviors in her classroom are found out. We can see one of them from the scene that giving many kinds of question to a student, Omura let him(her) examine what he(she) answered.